

いのちに差別を許さない人権保障の砦として

ラポール 医療福祉相談室たより

第11号 2013年3月7日

以前相談室日誌にて紹介したIさん、男性50才台は、派遣会社を辞めて以来定職に就いていない。慢性疾患があるゆえに、健康診断ではねられてしまうそうだ。

食事は、デパートの試食と浜に打ち上げられて食べられそうな物を食していたそうだ。夜は、電気・ガスを止められた空間でしのいでいた。生活保護を申請したが、受給できるまでの間の食事に困ってしまい、よく電話(テレホンカードを渡していた)が、かかってきた。その度ごとに食料の提供を行ったが、何とか生活保護受給まで頑張る事ができた。(本来は行政の役割であるが)

Iさんはことあるごとに電話をかけてきた。この前は、「鋳物製造に就くことができた。派遣だけれども」という内容だった。最近では電話をかけてくることも無くなったが、風の噂に「年齢の割に重労働で、辞めたい」とこぼしているそうだ。

政府は生活保護(生活扶助)削減を決めたという。ただでさえ最低生活費で生活しているのに、これ以上の削減は人間らしい生活を辞めろと言っているのに等しい。現在生活保護調査を行っているが、アンケートには、入浴は2週間に1回だったり、安い食材を購入したりと、節約や工夫、苦労を重ねていることが調査から判った。私たち(医療福祉相談室)は医療に共に寄り添い、福祉に寄り添った仕事をしている。人間が人間らしい生活を送ることがなぜできないのか、心から政府の対応に対して怒っている。

裏面に4団体共同による「生活扶助削減に断固反対する声明」が出されている。ぜひ一読して欲しいと思う。(S)